

文芸評論家、江藤淳氏が論壇を名指して批判した「ユダの季節」『徒党』と『私語』の構造(「新潮」八月号)がさまざまな反響を呼んでいる。江藤氏はこの中で、論壇人たちは自発的・人間的な言論を阻む「拘束的」な「教義」にとらわれており、この「教義」は古くは軍閥に起因する「自己検閲」と深く関係している——との問題提起を行っている。これは岡氏が最近展開している「戦後言語空間の再検討」の一環だが、以下は評論家、内村剛介氏による同論文批判である。

隠微きわまる検閲を、こゝもあろうに民主主義のくにアメリカが、占領下の日本で実施していた。このアメリカ軍の検閲スタイルは日本人自身による自己検閲を誘発するものであった。アメリカ占領軍は目的を達したろうが、それは戦後日本言論の荒廃というわれわれの犠牲においてなのである——江藤淳はかねてこう指摘しつづけてきたのだが、論稿「ユダの季節」『徒党』と『私語』の構造の発表をめぐって、その嘆きはついに怒りに転じている。自己の良心を外在

検閲自体は非力・無力なはずではないか。そもそも検閲とはどう定義すべきものなのか。江藤の脱は必ずしも明快ではないのだが、私などは検閲をてんなにえらく強力なものとは思っていないので、江藤の嘆き・怒りにむしろ彼自身の敗北主義を窺う思いである。

太郎の左衛門以前のこと。兄は、いわゆるインテリが嫌いであった。「インテリ」というのは、日本語だがね。何でも解ったふりをする奴という意味だ」と私にいったことがある——これは小林秀雄の妹高見澤潤子の最近の文章に見えることばだが、江藤はここにいうインテリつまり「解ったふりをする奴」ではない

本でアメリカ・デモクラの空気をけなげに嗅いでいたとき、私は社会主義デモクラの本場ソ連でまこと丹念に検閲つきあわされた。不情だけが修じうる唯一のものであるソ連では、不信を確固として信じるための保障が必要で、それが検閲制度なのだと理解したのであったが、同時に、それは嗅うべき徒党の足跡とも見えたのであ

検閲はつきものなのか、しからば徒党なしには生きられない人間にとって検閲はつぎものなのか、検閲は人間の繁栄のとも知れない、などと思ったりしたものもある。

江藤はよく検閲の存在とその悪を説くが「あつてはいる存在の逆説に敬意を払った様子はない。苦勞の足りなさからくるなまくらぶりであるロシア・ナロードであるロシア・ナロードは、生活に正対できないインテリを小馬鹿にしてきたものだが、二十世紀に入り、検閲々々の世の中になるとくりかえしインテリに教えていう——人間は万事に判れることができるチキショウ」そして「人さままさま、違ひはその狂いさま」なのだ、と。人間の能力はその劣劣ぶりにもっともよく現れると滑稽に見ているのだ。ニンゲンとはど

ここにあるのはヒトリスムではなくて人間個々人の能力への楽天的、絶対的な信頼だ。ロシア・ナロードはこの信頼に倚って絶望からの脱出を図る。ロシア・ナロードのこのいささかシニカルな人間信頼を共有するインテリ人がソビエトのロシアにもようやく現れてきている。しかも彼らは江藤らとほぼ同世代なのである。江藤らと彼らとの落差を見ると、私などは江藤らの側にこそなまくらゆえの人間不信・文学不信があらわであるといわざるをえない。

徒党の検閲

江藤淳氏の敗北主義

内村 剛介



一九二〇年生まれ。ハルビン学院卒。上智大教授。一九四五年ソ連に抑留され、十二年間ソベリアのラーゲリ生活を体験。「生き急ぐ」「呪縛の構造」「わが思念を去らぬもの」「憂鬱の作家たち」「ロシヤ無頼」「失語と断念」など評論、エッセイ多数。ソルジェニツィン「鹿とラブリの女」「エゼニン時世」トツキ「文学と革命」など訳書も多し。



今年、国連の「世界コミュニケーション年」である。だが、はなはしく展開されたかみえたる

「話しあおう」という姿勢である。だが、はなはしく展開されたかみえたる

次大戦、第三次大戦を経て、大きな広がり示すようになった。

第三世界の諸国が台頭してくるにつれ、多様な価値や世界観が外交関係の前

国際社会における「コミュニケーション」といえば、いまでも国家間だけの「コミュ

井上靖の短編集、ソ連で刊行

におかれた仏僧たちには断念はなかったとさげ切っていることも注目されよう。

「私語」によって連綿し「徒党」を組んで江藤に向かってきたというのであるから、江藤はここに持論の証明をえて快楽を叫ぶまでではないにしろ、平静を受けて流すべきだろう。ところが江藤は怒っているのである。

私は江藤の志の低きに驚いている。しかもない手合いが「徒党の検閲」をあえてしたというなら、その

人、生活と自分自身との間に事物や理念やらを介在させずにすまじう人、それを私はまともな人という。これに反し、理念や事物を介在させみずからを棚上げするところからいわゆるインテリなるものができ上がる。自分をすでに翻上げたインテリが他人をいい加減にあしらうことになるは理の当然だろう。これは江藤が引用する河上徹

にしても、インテリ徒党にふりまわされる限りにおいて、小林と全く異なるのである。この江藤を小林のいうインテリと区別してインテリ人としておこう。

検閲はあつてはならぬといふあたまたらの思い入れがインテリ人江藤を去らない。その意味では江藤は戦後アメリカ・デモクラの子でなまくらだと思ふ。肌えたる少年江藤が戦後の日

思えばそこは徒党がバルタイとなり、他の一切の徒党を認めないになのであつた。徒党の支配は検閲によって保障されるというのが二十世紀なのか、徒党に

りである。検閲は、あつてはならないからこそ、かえって存在する。汚いものはない方がいいのだが、現実にはわれわれの汚さに見合つて存在しつづける。よって人は汚い現実に向けるケレイゴトを口にしたくなる。その行きつく先が社会

主義的収斂というやつで、インテリはそこに落ち込んでホソを囓むまでは「ケレイゴト検閲」をおしすめる。江藤は戦後日本文化が構造上そこへ運んでいることを見逃しているのだが、ケレイゴトの母斑からはのがれえていない。「ワレシ・検閲悪シ」という単純な善悪二分法検閲観にそれが隠されている。むかしから苦勞のしづめであるロシア・ナロードは、生活に正対できないインテリを小馬鹿にしてきたものだが、二十世紀に入り、検閲々々の世の中になるとくりかえしインテリに教えていう——人間は万事に判れることができるチキショウ」そして「人さままさま、違ひはその狂いさま」なのだ、と。人間の能力はその劣劣ぶりにもっともよく現れると滑稽に見ているのだ。ニンゲンとはど